猪狩満直

猪狩満直（一八九八～一九三八）　福島県石城郡好間村大字川中子字五ノ神の農家に生まれ、一九一三年私立磐城青年学校入学、退校。一九一七年バプテスト教会の洗礼を受け聖書の研究に没頭、ホイットマン、ワーズワース、バーンズ、ハイネの詩を読む。一九二二年三野混沌、妻木泰治と詩誌『播種者』を発行、一九二五年四月、妻子と北海道の開拓地、釧路国阿寒郡舌辛村二十五線に移る。草野心平らの『銅鑼』に詩を書き、一九二八年『至上律』に拠る更科源蔵らと交友、翌年詩集『移住民』を銅鑼社から出す。更科らと『北緯五十度』創刊、同年一〇月開墾地八町歩と家を売却して郷里に帰る。健康の不安から再度の渡道を見送って養鶏、養蜂、トマトつくりをはじめる。詩集『農成調査』（一九三一年）と『秋の通信』（一九三四年）を出して後詩作なしという。一九三八年四月郷里の実家で死去、未刊の詩集、短篇集、随筆、短歌等が残されているという。

吹雪の夜の会話

ずいぶんふぶくねお父うちゃん
こんなに吹雪いたら小屋がのまってしまわないか。
のまったって平気だよ
あしたお父ちゃんがスコップで掘ってやるよ。
だって小屋が泣いてるだないか
ああ窓がみえなくなった。
泣いてるだないよ
歯ぎしりかんでるのだよ。
だってつぶれたらどうする。
小屋なんてそんなに弱虫でないよ
はしらがづうっと土の中にがんばってるんだよ。
あら　あっこの穴から

つめていな。
つめていなんて言うもんじゃないよ
つめていて言うと余計に吹きこむんだよ
バカ野郎って笑ってやるもんだよ。
だって冷たくてねむれねいでねいか。
だから父うちゃんはさっきから言ってるじゃないか
ぼうしか風呂敷をかむって寝なさいって。
明日は止むかい。
止むとも。

明日はいいおてん気で
お日さんは
悪者の雪さんを
いぢめてくれるとさ。
お日さんと

雪さんと角力とったら
どっちが負けるかね。
さあ
みんなでねむろ
いち・に・さん。

馬

ずいぶん深いな
ふかい雪の下でいい匂いがするな
どれ　雪を蹴っぽってみよう
ほうら
みんなよ
この雪の下には
こんなにいい青笹がかくされてあるんだねいか
蹴散らせ
おいらの足がすりこぎになるまで
蹴散らせ
おいらがおいらの笹を食べるに道徳も法律もあったものか
おいら腹がへっている

だがみんなよ
うれしいことには
そろそろ木の芽がむらさき色にけむってきたようだ
ガタガタ雪が解けくづれ
地はおれたちのパラダイス
春が来るっていうことも夢じゃないのだ

馬　橇

あいつ眼鏡掛けている
あいつロひげはやしている
あいつとてもぬくそうなオーバ着ている
あいつ長靴はいてカバンさげている
あいつおらの仕事場に来て
おらの仕事ベロンとほっ立ってみている
あいつシガレットをふかしながら
おらの馬汗だくになって引き出す橇みてけつかる
あいつ金というものはえらいものだ
その金もってるおれはどえらいものだ
どうだ何十頭の馬と
血気の若者を

どんな山の奥であろうと
どんなに雪の中であろうと
自由自在に
あいつ豚あごで自問自答して
しろこ笑している
あいつ
おれの為に
いい金もうけさしてもろうお前達は
ほんとうに幸いだと考えろ
そのくせ
あいつ自分の為に
胸ぐらでパチパチそろばんはじいている
おれだち
あいつのそろばんの上で
パチパチはじかれている

か　で

貧乏はおらを雪の中へひっぱり出した
貧乏は病気のおらを雪の中へ引づり出した
堅いいい木
重いい鋸
鉞を振り上ぐるたんび
おらは胸が痛いい
動悸が高まり
急に世界が暗くなっておらは雪ん中に倒れた
雪ごろまりになって起き上った
かでをもってくるための働きだ
かで、かでを
だがかでの為に生を奪われるおらではないか

強制労働
おらは反抗する
あくまで敵対する
まっ白な雪の中で
零下の寒気の中で
このまま目をつむれるもんか
おら　おらは

ある百姓の詩

死んでゆく者は死んでゆけ
去る者は去れ
来る者は来れ
生きる者は生きてゆく
闘う者は闘ってゆく　どこまでも
「漠然たる不安」そんな幽霊にとりつかれる奴は誰だ
あ片やモルヒネの世話になるには　俺達の血は余りに若すぎる

俺達はあらゆる途上の苦をしばらく忍べ
今日のあらゆる欠乏にしばらくたえろ
俺達は明日を一瞬も疑うな

詩

ボロボロなおしめ
汗のプンプンする赤い足巻毛布と
土管のようなズックのゲートル
朝夕
出這入りに
頭にひっかかって
なんとまあうるさいことだが
こいつが
万国の
おれだちの国旗なんだでないか
寒い時には火を焚くことさ
流れがうずめられたら

雪を解かしてのむことだ
カンテラの灯は
くらくとも
おれだちの食卓を輝かすに充分だ
腹がへったら
たくわんかじって湯をのむくらいな
ことはおぼえているね
あははって笑うのか
妻よ
おれはおまえの泣き声よりも
笑い声の方が腹わたにしみとおる

馬

昨日四石ひいたら
奴　今日五石ふんづけやがった
今日正直に五石ひいたら
奴　明日は六石積むに違いねい
おら坂へ行ったら
死んだって生きたってかまわねい
すべくったふりして
ねころんでやるベイ
そしたら橇がてんぷくして
　橇にとっぴしゃがれて
ふんぐたばるべ

おれが口きかないともって
畜生
明日はきっとやってやる

馬　橇

ヤチダモの十尺
十尺の二〇
この材は何に使うんだろ
そんなこと考えなくたっていい
ただ橇にのっけて引っぱればいい
金になればいい
もっきり酒やれればいい
妻子の口すすげればいい
よこせっていう税金払えればいい
縛られた財産の縄がとければいい
一日を死んで
一日を生きればいい

おれだちか
おれだちの体
おれだちの体でない
おれだちの仕事
おれだちの仕事でない
地球はぶちこわさなければならぬ

馬　橇

奴の馬足速い
いつの間にかおら馬にかっついでいた
おらあわてて涙かんのごった
かんのごって
お早ようってやった
奴もお早ようって云った
ずいぶん今朝はシバレルなって云ったら
奴もずいぶんシバレルなって云った
よく毎日体が続くなって云ったら
人は続くが馬が続かねいってぬかした
おれの馬橇へ来てあたらねいかって云ったら
火あるんだって奴こなかった

奴の馬口のまわりにだんごになった氷を
おれの橇にこちつけていた
おれの口ひげジャリジャリになった
奴のまっ毛にも真白い霜の花が咲いていた

あいつ何しゃべってんだ

あいつ
何しゃべってんだ

牛を買えってか
馬を飼えってか
補助金をやるるてか
機械で仕事しろってか
もっと生産能率をあげろってか
もっと科学的経営法を学べってか
でなかったら農民は自滅するより外にないってか

あいつ何しゃべってんだ

馬のけつから馬糞が出る
おらあなんぼ馬鹿でもそれ位なことは知ってると
馬のけつから馬糞が出る
それが大学の講堂で学んで来た
経済学って云うものなのけ
だが　おらあの話を聞いてくれ
昨日ついた味噌今日食ったら
とても塩っぱかったということだ

テーブルたたいたって誰が拍手なんかするものか
止せ！
テーブルをへだててしゃべるのは

告　白

僕はいま北海道にいるのだ
北海道の曠野の中の
二間に三間のちっちゃな小屋の中の
荒莚の上に、ねたりおきたり
——どうして君は北海道へ行ったか？
なぜ百姓などやっているのか？
そんなら僕は君達に告白しよう
僕は殺そうとした人間を、人間を殺せなかったからさ
結局は嘘をつくことの出来ない人間だからさ

仲間よ俺達は戦っている

稲黍飯くっていると
ネチネチ腹わたがねっからまいそうだ
塩もない
赤貧乏
その上　病気ときやがる
俺達の頸をつるしたがってる木ならいくらでもあるさ
だがそんな木を伐り倒しては焚木にしている俺達だ
どんなときでも仲間よ
俺達は俺達の瞳のような子供のあることを忘れはしないんだ
どんなときでも仲間よ
俺達は新らしい地を継ぐ子供のあることを忘れはしないんだ
飢餓

吹雪
仲間よ　俺達はたたかっている